

簿記原理に対する学生の意識と問題点

斎 藤 孝 一

◆キーワード：

簿記に対する学生の意識 Student Opinion about Bookkeeping 資本, 収益,
費用の概念 Concepts of Capital, Revenue, and Expense

1. はじめに

筆者は、1988年より簿記原理の授業を愛知学泉大学経営学部において担当しているが、学生の簿記原理に対する関心、成績ともに極めて不満足な状態にあると考えている。このような憂慮すべき状態の原因は一体どこにあるのかを明確にすることと、おびただしい数の簿記入門のための教科書の概要についての資料を提供し、望ましい簿記原理の授業について考察することが本稿の目的である。

本稿は、次の項目から成っている。

- (1) 学生自身は簿記原理をどのように思っているかについてのアンケート。
- (2) 簿記原理の範囲はどこまでと考えるべきか。各教科書はどの程度の範囲を扱っているのか。
- (3) 各教科書は資本に関する取引の中で株式会社を扱っているか。
- (4) 各教科書の資本についての説明は的確でわかりやすいか。
- (5) 各教科書の収益・費用についての説明は的確でわかりやすいか。

(6) 各教科書の勘定記入の基本原理についての説明は十分になされているか。

上記の(1)～(6)の項目の中で(1)は学生の意識を見るためのものである。(4)～(6)を取り上げたのは、それらが簿記のメカニズムの最も基本的な部分であり、かつ初学者がまず最初にぶつかるハードルと考えられるからである。(3)は検定試験の3級の範囲にははいていないものの社会的な知識としては重要であると思われるものである。

2. アンケートとその結果について

筆者は簿記原理の授業を3クラスで担当している。次のアンケートはその3クラスを対象に1989年10月に行ったものである。3クラスは無資格者を除き合計143名であり、欠席者を含め回収できなかった数は29である。回収率は77.6%、回答率は100%である。

表1は簿記原理について難しいと思うか、やさしいと思うかの感想をたずねたものである。これによると90%の学生が難しいと感じていることがわかる。表2と図1はアンケート調査の時点で学生がどのような項目を難しいと感じているかを表している。これによると、「手形」と「商品勘定と3分法」については7割の学生が、「有価証券」については6割の学生が、「商品有高帳」、「決算手続」については約半数の学生が難しいと思っている。これらの項目は、手続や処理の仕方が面倒で手間を要するという共通点をもっている。

それでは、難しいと感じる理由を学生自身はどう思っているのだろうか。表3は難しいと感じる理由についてのアンケートの結果である。表3は自分の不勉強を学生自身が認めていることを示している。すなわち、70%弱の学生が「(4)自分の不勉強」を選択している。ただ50%強の学生が進度がはやいと感じていることに注意する必要があるだろう。以外に思ったのは、「(1)分量が多すぎる」を選択した学生が30%強と少ない点である。学生自身が自分の不勉強を簿記原理を難しいと感じる第一の原因にあげているわけであるが、表4. と表5. はそのことをさらに雄弁に物語っている。

簿記原理に対する学生の意識と問題点

アンケート 1989年10月

1. 簿記原理はやさしいですか。
 (1)やさしい (2)むずかしい (3)ふつう
2. 今まで学習した範囲でどれがむずかしかったですか。
 以下は練習問題集の項目です。
 (1)資産・負債・資本 (2)収益・費用
 (3)取引・勘定記入 (4)仕訳・転記
 (5)仕訳帳・元帳 (6)試算表の原理
 (7)6けた精算表 (8)決算手続き
 (9)現金・預金 (10)小口現金
 (11)有価証券 (12)商品勘定と3文法
 (13)仕入帳・売上帳 (14)商品有高帳
 (15)売掛金・買掛金 (16)手形
3. むずかしいと感じる理由はどれですか。
 (1)分量が多すぎる (2)進み方がはやい
 (3)問題練習の時間が少なすぎる
 (4)自分の不勉強 (5)その他
4. 予習について教えてください。
 (1)たいていする (2)時々する (3)しない
5. 復習について教えてください。
 (1)たいていする (2)時々する (3)しない

表1 簿記原理に対する難易感

	実 数	%
やさしい	1	1
難 しい	99	89
ふ つ う	11	10
計	111	100

表 2 難しいと感じた項目

	実 数	%
(1)資産・負債・資本	6	5
(2)収益・費用	8	7
(3)取引・勘定記入	15	14
(4)仕訳・転記	14	13
(5)仕訳帳・元帳	14	13
(6)試算表の原理	21	19
(7)6桁精算表	27	24
(8)決算手続き	56	50
(9)現金・預金	32	29
(10)小口現金	45	41
(11)有価証券	66	59
(12)商品勘定と3分法	79	71
(13)仕入帳・売上帳	35	32
(14)商品有高帳	60	54
(15)売掛金・買掛金	43	39
(16)手 形	83	75

回答は複数を選択

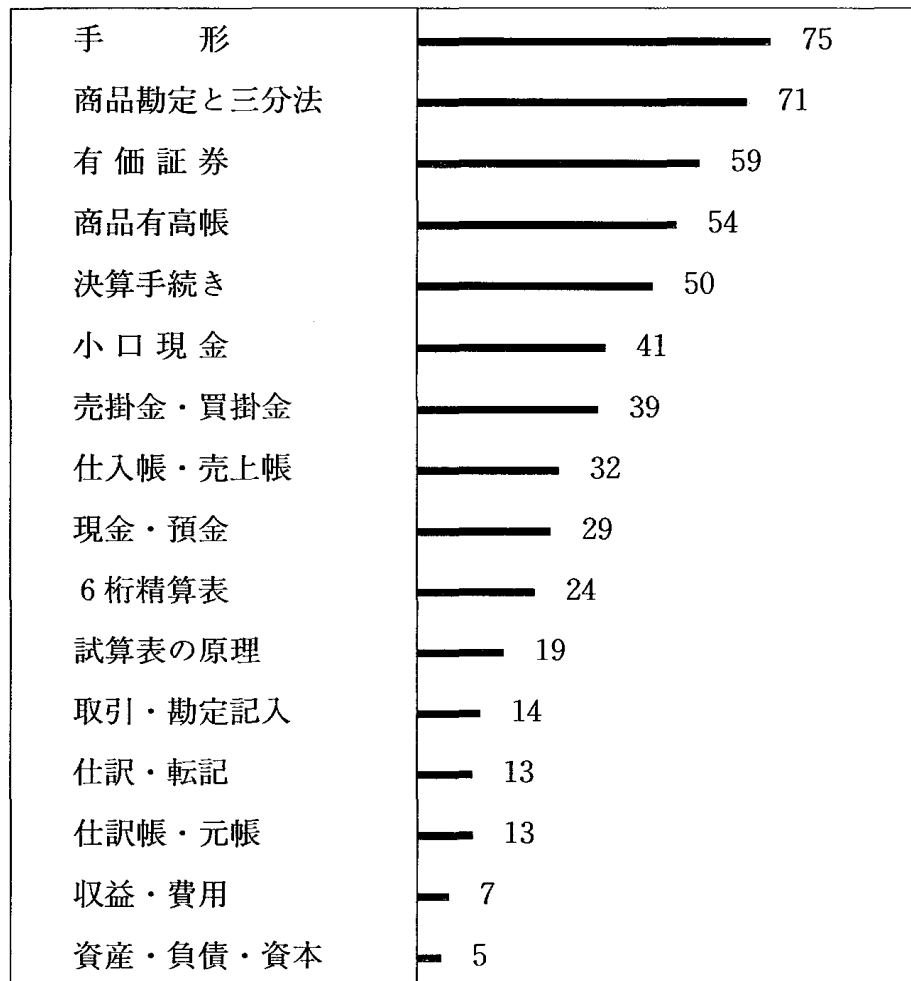
表 3 難しいと感じる理由

	実 数	%
(1)分量が多すぎる	34	31
(2)進み方がはやい	60	54
(3)問題練習の時間が少なすぎる	16	14
(4)自分の不勉強	75	68
(5)そ の 他	10	9

回答は複数を選択。

簿記原理に対する学生の意識と問題点

図1 難しいと感じた項目



回答は複数を選択

表4は学生の予習状況を、表5は復習状況を表している。予習については、たいていすると答えた者は皆無であり、時々すると答えた者でさえわずか20%弱にすぎない。また復習については、たいていすると答えた者は2人であり、時々すると答えた者は3割強であるので、まだ予習よりもましといえるかもしれない。

それでは、表1から表5にみられるような意識をもつ学生の実際の成績はどうであろうか。表6は1989年の前期試験の成績である。この表からわかるとおり79点以下の学生は86%であり、80点以上の学生は14%である。

さらに、表6と表1および表3、表4、表5とを比べてみると興味深い。表7はその一覧表である。個人別に成績と意識を対応させていないので確か

表4 予習について

	実 数	%
(1)たいていする	0	0
(2)時々する	21	19
(3)し な い	90	81
合 計	111	100

表5 復習について

	実 数	%
(1)たいていする	2	2
(2)時々する	35	32
(3)し な い	74	67
合 計	111	101

表6 前期試験の成績

	実 数	%	累 計	%
0～ 59	104	69	104	69
60～ 69	12	8	116	77
70～ 79	13	9	129	86
80～100	21	14	150	100

表7 成績と意識、予習、復習の関係

表1から 難しいと感じる者	89%
表4から 予習をしない者	81%
表6から 79点以下の者	86%
表4から 復習をしない者	67%
表6から 59点以下の者	69%
表3から 自分の不勉強	68%

な相関関係があるとは断定できないが、次のようなことが言えるのではないだろうか。すなわち、簿記原理を難しいと感じている学生は、予習をしないで授業にのぞむので十分に授業を消化できない。また予習をしない学生は80点以上をとりにくく、復習をしない学生は70点以上をとりにくい。さらに、自分の不勉強に原因があると考えている学生と復習しない学生の割合は共に70%弱であるので、学生自身も復習しないことを良いことだとは思っていない。これらのことは経験的に十分に納得のいく結論であると思われる。また、表3で見たように授業の進度をはやいと感じていない学生も約半数いるわけであるから、その中にも難しいと感じている学生がいることになる。

3. 簿記原理の内容について

(1) 簿記原理の範囲はどこまでか

表2ならびに図1は学生が簿記原理のどの項目を難しいと感じているかについてのアンケートの結果である。それによると先にも述べたように手続きの面倒な、処理の手間のかかる項目を選択しているのに対して、簿記のメカニズムの最も基本的な項目は低い割合を示している。すなわち、「手形」は75%、「商品勘定と3文法」は71%、「有価証券」は59%であり、一方「資産・負債・資本」は5%、「収益・費用」は7%、「取引・勘定記入」は14%である。このようにアンケートで見ると、簿記の基本的メカニズムは良く理解しており、難しいと感じるのはただ手続きや処理に慣れていないからであるように思える。しかしながら、はたして本当に彼等は基本的な簿記のメカニズムを理解しているのだろうか。むしろ、一見複雑そうに見える処理や手続きの面倒な項目を苦手としているのは、基本に対する理解が欠けているからではないのだろうか。表3に見るように半数の学生が進み方がはやいと感じている現在のような限られた授業時間で、しかもさしたる動機づけをもたない学生に対して簿記原理は何を教えるべきであろうか。

表8は簿記入門用の教科書94冊がどのようなタイトルで書かれているかを示した表である。この表によると簿記原理というタイトルの本は94冊中7冊

である。¹⁾ そのうち 5 冊は簿記原理という章もたてている。また、94冊のうちに簿記原理という章を設けているものは43冊であり、これは全体の46%にあたる。

表 8 簿記教科書のタイトル分類 (94冊)

タイトル分類	冊 数	タイトル分類	冊 数
簿 記	12	簿記講義	5
簿記論	11	簿記精説	4
簿記会計	9	簿記要論	4
商業簿記	9	簿記概論	4
簿記入門	8	簿記演習	4
簿記原理	7	簿記の基礎	2
簿記通論	7	そ の 他	8

表 9 章「簿記原理」の内容

	実 数	%
資産・負債・資本・収益・費用	27	63
取引・勘定	39	91
仕訳・転記	26	60
試算表・精算表	25	58
決算手続	31	72
貸借対照表・損益計算書	22	51

表 9 は簿記原理という章を設けている43冊のテキストがその章で何を取り上げているかを見たものである。これによると 9 割のテキストが「取引・勘定」を取り上げており、7 割が「決算手続き」を、6 割が「資産・負債・資本・収益・費用」や「仕訳・転記」、「試算表・精算表」を取り上げている。また、半数が「貸借対照表・損益計算書」を取り上げている。これは簿記の

簿記原理に対する学生の意識と問題点

基本的なメカニズムについて述べられたものである。この他に提起されているのは、企業の計算制度とか、簿記の目的、簿記の用途などである。

表10 各テキストの内容

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計
総 数	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(1)	4	11	8	7	11	4	7	4	4	9	7	4	2	8	90
(2)	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(3)	4	11	8	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	92
(4)	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(5)	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(6)	5	10	9	7	10	4	7	4	3	9	7	4	2	8	89
(7)	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(8)	5	10	6	7	11	4	7	4	4	9	7	4	1	6	85
(9)	4	11	8	7	10	3	7	4	4	9	7	4	2	6	86
(10)	5	11	9	7	11	4	7	4	4	9	8	4	2	8	93
(11)	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(12)	5	11	8	7	11	4	7	4	4	9	8	4	2	8	92
(13)	5	11	8	7	12	4	7	4	4	9	7	4	2	8	92
(14)	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	7	4	2	8	93
(15)	5	9	6	6	11	4	7	4	1	8	7	3	2	7	80
(16)	5	11	9	7	11	4	7	4	3	9	7	4	2	8	91
(17)	4	9	3	5	10	4	5	2	2	9	7	3	1	5	69

次に、94冊の簿記テキストは何をその内容にしているのかを検定試験3級の範囲と対比して見ることにする。比較のために採用した基準は、3級の検定試験用の問題集を参考にしてまとめたものである。表10は表8で分類したタイトルにしたがってテキストが何を提起しているかを見たものである。

表10の本のタイトルはAからNまでその他をいれて14とおりある。3級の範囲についての提起方はほとんど大差がないが、(17)伝票について、C.

簿記会計は 9 冊中 3 冊，H. 簿記要論は 4 冊中 2 冊，I. 簿記概論も 4 冊中 2 冊，N. その他は 8 冊中 5 冊である点が目につく。全体で見た場合には，(6)有価証券が89／94，(8)仕入帳・売上帳が85／94，(9)商品有高帳が86／94，(15)資本金と引出金が80／94，(17)伝票が69／94と取り上げ方が若干少ないといえよう。

(1)～(17)および A ～ N は次の通りである。

(1)資産・負債・資本・収益・費用

(2)取引・勘定 (3)仕訳・転記

(4)決算 (試算表・精算表・損益計算書・貸借対照表を含む) (5)現金・預金

(6)有価証券 (7)商品勘定と 3 文法

(8)仕入帳・売上帳 (9)商品有高帳

(10)売掛金・買掛金 (11)手形

(12)その他の債権・債務

(13)貸倒れと貸倒引当金

(14)固定資産と減価償却

(15)資本金と引出金

(16)収益・費用の見越，繰延 (17)伝票

A. 簿記講義 B. 簿記論 C. 簿記会計

D. 簿記原理 E. 簿記 F. 簿記精説

G. 簿記通論 H. 簿記要論 I. 簿記概論

J. 商業簿記 K. 簿記入門 L. 簿記演習

M. 簿記の基礎 N. その他

次の表11は上述の94冊のテキストが3級の範囲以上を取り上げているか，特に株式会社会計と本支店会計を取り上げているかを見たものである。A. ～N. は表10と同じタイトルを表している。また(18)は3級の範囲外，(19)は株式会社会計，(20)は本支店会計である。表11からは約9割のテキストが何らかの形で3級以上の項目を扱っており，9割弱が株式会社会計を扱っていることがわかる。一方，本支店会計を扱っているのは7割強である。テキストの

表11 株式会社会計・本支店会計の取扱い

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計
総 数	5	11	9	7	12	4	7	4	4	9	8	4	2	8	94
(18)	5	10	9	7	10	4	7	4	4	7	6	4	2	6	85
(19)	5	10	9	7	9	4	7	4	4	7	6	4	2	5	83
(20)	4	9	7	6	9	3	5	4	4	7	5	4	1	6	74

(18) 3 級以上 (19) 株式会社会計 (20) 本支店会計

タイトル別にみると、K. 簿記入門が本支店会計に関して 5 / 8 (6 割強) と相対的に低い割合を示している。前述のとおり株式会社会計は、学生が社会に出るにあたって必要な知識と筆者は考えている。この点、検定試験 3 級の範囲のテキストでは不十分であろう。簿記原理の入門的な性格と大学の限られた授業時間とを考え合わせると、3 級の範囲に株式会社会計を加えるのが妥当な線なのではないだろうか。

(2) 資本・収益・費用の説明について

表12は各テキストが資本、収益、費用について行っている説明をある基準に照らして分かりやすいか否かを見たものである。資本、収益、費用を取り上げたのは、簿記のメカニズムの基本を成している重要な概念でありながら、その説明が必ずしも十分に行われていないと思うからである。取り上げた基準は次のとおりである。

資本：資本とは資産と負債の差額である正味財産であるという計算構造の記述の他に、店主、株主などの資本主が出資した分とその増加分といった記述があるかどうか。

収益：財貨の販売またはサービスの提供によって生ずるものという記述の他に、増資（その他の資本取引）以外によって資本を増加させる原因といった記述があるかどうか。

費用：収益を得るために生産的に消費された価値犠牲という記述の他に、減資（その他の資本取引）と利益処分以外によって資本を減少させる原因といった記述があるかどうか。

表12 資本・収益・費用の説明について (1)

		資 本	収 益	費 用
簿 記 講 義	(1)	△	△	△
	(2)	△	○	○
	(3)	△	×	×
	(4)	△	△	△
	(5)	×	×	×
簿 記 論	(1)	×	×	×
	(2)	△	△	△
	(3)	△	△	△
	(4)	△	△	△
	(5)	×	×	×
	(6)	△	△	△
	(7)	○	○	○
	(8)	△	△	△
	(9)	△	△	△
	(10)	△	×	×
	(11)	△	△	△
簿 記 会 計	(1)	△	×	×
	(2)	△	○	○
	(3)	△	○	○
	(4)	×	×	×
	(5)	△	×	×
	(6)	△	△	△
	(7)	△	△	△
	(8)	○	△	△
	(9)	△	○	○

○：基準の記述がある △：説明不足 ×：説明なし

簿記原理に対する学生の意識と問題点

表12 資本・収益・費用の説明について (2)

		資 本	収 益	費 用
簿 記 原 理	(1)	○	△	△
	(2)	△	△	△
	(3)	△	△	△
	(4)	△	△	△
	(5)	△	○	○
	(6)	△	△	△
	(7)	△	△	△
簿 記	(1)	△	○	○
	(2)	△	△	△
	(3)	△	△	△
	(4)	○	×	×
	(5)	○	○	○
	(6)	△	○	○
	(7)	△	△	△
	(8)	△	○	○
	(9)	△	△	△
	(10)	△	○	○
	(11)	△	△	△
	(12)	△	○	○
簿 記 精 説	(1)	○	○	○
	(2)	△	△	△
	(3)	△	○	○
	(4)	△	△	△

○：基準の記述がある △：説明不足 ×：説明なし

表12からはタイトルごとにどのテキストが上述の基準を満たしているかを番号によって知ることが可能である²⁾。また、表13は表12の○の数を集計したものである。表からわかるとおり資本については、「商業簿記」が3割強、

表12 資本・収益・費用の説明について (3)

		資 本	収 益	費 用
簿 記 通 論	(1)	△	△	△
	(2)	△	△	△
	(3)	△	△	△
	(4)	×	△	△
	(5)	△	△	△
	(6)	△	△	△
	(7)	△	△	△
簿 記 要 論	(1)	△	△	△
	(2)	△	△	△
	(3)	○	△	△
	(4)	○	○	○
簿 記 概 論	(1)	△	△	△
	(2)	△	△	△
	(3)	△	△	△
	(4)	△	△	△
商 業 簿 記	(1)	△	○	○
	(2)	△	△	△
	(3)	○	△	△
	(4)	○	○	○
	(5)	△	△	△
	(6)	△	△	△
	(7)	○	△	△
	(8)	△	△	△
	(9)	△	○	○

○：基準の記述がある △：説明不足 ×：説明なし

収益と費用については「簿記」、「簿記精説」、「簿記入門」が5割,「簿記会計」「商業簿記」が3割強である。全体的には,○の数すなわち上述した基準に

簿記原理に対する学生の意識と問題点

表12 資本・収益・費用の説明について (4)

		資 本	収 益	費 用
簿 記 入 門	(1)	×	×	×
	(2)	○	△	△
	(3)	△	○	○
	(4)	△	×	×
	(5)	△	△	△
	(6)	△	○	○
	(7)	△	○	○
	(8)	△	○	○
簿 記 演 習	(1)	△	△	△
	(2)	△	△	△
	(3)	△	○	○
	(4)	△	△	△
簿記の基礎	(1)	△	△	△
	(2)	△	△	△
そ の 他	(1)	△	△	△
	(2)	△	△	△
	(3)	△	△	△
	(4)	△	△	△
	(5)	△	△	△
	(6)	△	○	○
	(7)	△	△	△
	(8)	○	△	△

○：基準の記述がある △：説明不足 ×：説明なし

そった説明がなされているものは、資本については14%，収益と費用については26%である。このことは、資本、収益、費用ともに十分な説明の行われていないテキストが多数存在することを示していると言えるのではないだろうか。

表13 基準にそった説明の数

	資 本	収 益	費 用
簿 記 講 義	0/5	1/5	1/5
簿 記 論	1/11	1/11	1/11
簿 記 会 計	1/9	3/9	3/9
簿 記 原 理	1/7	1/7	1/7
簿 記	2/12	6/12	6/12
簿 記 精 説	1/4	2/4	2/4
簿 記 通 論	0/7	0/7	0/7
簿 記 要 論	2/4	1/4	1/4
簿 記 概 論	0/4	0/4	0/4
商 業 簿 記	3/9	3/9	3/9
簿 記 入 門	1/8	4/8	4/8
簿 記 演 習	0/4	1/4	1/4
簿記の基礎	0/2	0/2	0/2
そ の 他	1/8	1/8	1/8
合 計	13/94	24/94	24/94

(3) 勘定記入（費用と収益）の説明について

表14は勘定記入の構造のうち費用と収益について明確な説明がなされているか否かを以下に示す基準に従って見たものである。この点を取り上げた理由は、費用の発生を借方、収益の発生を貸方に記入する理由を、ともすれば理由の説明なしに単に既定の仕組であるといった記述や、単に損益計算書に記載されている方向に費用と収益を記載するといった記述が多く見られるからである。基準は次のとおりである。

◎収益と費用は資本の増加と減少を示すものであるから、収益は資本と同じく貸方に、費用は反対に借方に記入される。

簿記原理に対する学生の意識と問題点

表14 勘定記入構造（収益と費用）の説明

簿記講義	(1)△ (5)△	(2)△	(3)△	(4)△
簿記論	(1)× (5)△ (9)△	(2)○ (6)△ (10)△	(3)○ (7)△ (11)△	(4)△ (8)△
簿記会計	(1)△ (5)△ (9)△	(2)△ (6)△	(3)○ (7)○	(4)△ (8)△
簿記原理	(1)○ (5)○	(2)△ (6)△	(3)△ (7)△	(4)△
簿記	(1)○ (5)○ (9)△	(2)△ (6)△ (10)△	(3)○ (7)△ (11)○	(4)× (8)○ (12)○
簿記精説	(1)○	(2)△	(3)○	(4)○
簿記通論	(1)△ (5)○	(2)△ (6)△	(3)△ (7)○	(4)△
簿記要論	(1)△	(2)△	(3)○	(4)△
簿記概論	(1)△	(2)△	(3)△	(4)△
商業簿記	(1)△ (5)△ (9)△	(2)△ (6)△	(3)○ (7)○	(4)△ (8)△
簿記入門	(1)× (5)△	(2)△ (6)△	(3)○ (7)△	(4)× (8)○
簿記演習	(1)△	(2)△	(3)△	(4)○
簿記の基礎	(1)○	(2)△		
その他	(1)△ (5)△	(2)○ (6)△	(3)△ (7)△	(4)○ (8)△

○：基準の記述あり △：不十分 ×：説明なし

表15 基準にそった説明数（勘定記入構造）

簿記講義	0/5	簿記論	2/11
簿記会計	2/9	簿記原理	2/7
簿記	6/12	簿記精説	2/4
簿記通論	2/7	簿記要論	1/4
簿記概論	2/4	商業簿記	2/9
簿記入門	2/8	簿記演習	1/4
簿記の基礎	1/2	その他	2/8
全体	25/94		

表15は各テキストのタイトル別にみた上記の勘定記入構造についての基準にそった説明数を示している。全体的にみた場合、基準にそった説明を行っているものは約 $1/4$ であり、「簿記」の $6/12$ が目立つ程度である。費用と収益に関する勘定記入構造の説明についても十分な説明を行っているテキストは少ないといえよう。

4. む す び

簿記原理についてのアンケートから分かるとおり、学生は簿記原理を難しいと思っているにもかかわらず、残念ながらそれを積極的に解決しようとしているとは思われない。個々人についてみた場合は、もちろん満点をとる学生も何人かはおり、当然80点以上の学生も少数ではあるがいるのではあるが、一般に学生は勉学に対して不熱心である。これはある程度予想されたことではあるが、あらためてアンケートをとってみると愕然とする思いである。このように勉学に対して極めて低い動機づけしかもたない学生に対してどのようにすればその意欲に火をつけることができるかは、いうまでもなく筆者一人のみならず大学にとっても非常に大きな課題である。

また、学生が難しいと感じている真の原因は手続きや処理の繁雑さにあるのではなく、基本的なメカニズムに対する理解の不足にあるのではないか

と仮定して94冊のテキストを調査したが、簿記の担当教員の数と同じくらいあるのではないかと思われるテキストについては、本稿でみたように、その多くの基本的なメカニズムについてさえも十分に説明が行われているとはいえない。簿記入門のためのテキストといえども会計学に対する深い理解が求められよう。このことは安易にテキストを作成することについて警鐘を鳴らすものであると考えることができるかもしれない。

簿記原理の授業時間数は他の科目と同様に年間をとおしてみても十分とはいえない。簿記原理といった極めて初歩的な領域ではあっても、この限られた時間内で十分な成果をあげるためには学生自身の自覚がどうしても必要と思われる。

注

- 1) 本稿では94冊のテキストを便宜上14のタイトルに分類したが、それぞれがどの分類に属するかは表示しない。調査したテキストは参考文献として記載するにとどめる。
- 2) やはり本稿ではどの番号がどのテキストに該当するかは明記しない。

参考文献

- 會田義雄著『改訂簿記講義』国元書房，昭和60年
青木三十一著『事例でわかる簿記入門』同文館出版，昭和60年
青柳文司著『簿記要説』（改訂版）中央経済社，昭和62年
新井清光著『最新簿記論』（改訂版）中央経済社，昭和61年
新井清光著『商業簿記教科書（上）』共栄出版，昭和62年
新井清光監修『簿記会計教科書』共栄出版，昭和62年
新井益太郎著『商業簿記入門』（改訂版）実教出版，昭和59年
荒川邦寿著『簿記会計通論』中央経済社，昭和56年
石山傳他著『簿記論』税務経理協会，昭和60年
泉暹編著『簿記会計講義』中央経済社，昭和62年
泉谷勝美著『簿記論』森山書店，昭和56年
市川深著『実践簿記論』（二訂版），昭和61年
井上英雄著『初級簿記』同文館出版，昭和62年
井上達雄著『現代商業簿記』（全訂版），中央経済社，昭和62年
今井信二著『改訂簿記通論（増補版）』千倉書房，昭和62年
氏原茂樹著『基本簿記会計』多賀出版，昭和62年
確永悟史著『簿記』中央経済社，昭和62年
内山力著『現代簿記原理』中央経済社，昭和62年
宇南山英夫著『（新版）簿記原理』第三出版，昭和63年

太田哲三著『新版 商業簿記』(増補版) 産学社, 昭和51年
 太田哲三他著『新簿記原理』(改訂版) 中央経済社, 昭和62年
 大西時雄著『簿記原理』税務経理協会, 昭和58年
 岡下敏著『商業簿記入門』同文館出版, 昭和61年
 鬼木繁著『実践簿記論Ⅰ』中央経済社, 昭和62年
 片岡武夫他著『基本簿記講義』(改訂版) 中央経済社, 昭和62年
 片野一郎著『新簿記精説』同文館出版, 昭和62年
 加畑彌榮次他著『現代簿記要論』中央経済社昭和61年
 神森智他著『企業簿記論』(改訂版) 中央経済社, 昭和62年
 川上肇著『簿記・会計学』酒井書店, 昭和51年
 河合信雄編『現代複式簿記』税務経理協会, 昭和62年
 木内佳市他著『簿記概論』同文館出版, 昭和62年
 城戸宏之著『ひとりで学べる簿記入門』同文館出版, 昭和62年
 城戸宏之著『基礎からの簿記Ⅰ－入門コース－』同文館出版, 昭和62年
 木村和三郎他著『簿記学入門』森山書店, 昭和61年
 久木田重和著『簿記の基礎』白桃書房, 昭和62年
 久野光朗編著『簿記論講義』同文館出版, 昭和62年
 黒澤清著『商業簿記』(新訂増補版) 一橋出版, 昭和54年
 黒澤清著『新講商業簿記』千倉書房, 昭和59年
 坂本安一編『基本簿記演習』(改訂版) 同文館出版, 昭和62年
 佐藤孝一他著『現代簿記通論』(新訂版) 中央経済社, 昭和61年
 佐藤康男著『簿記会計の基礎』(二訂版) 白桃書房, 昭和60年
 畠村剛雄著『簿記の学び方』(増補版) 白桃書房, 昭和55年
 畠村剛雄他著『基本簿記通論』(改訂版) 白桃書房, 昭和51年
 清水誠一他著『商業簿記の基礎』中央経済社, 昭和62年
 神野金之助著『入門商業簿記』(四訂版) 同文館出版, 昭和58年
 杉岡仁著『企業簿記概論』(改訂版) 中央経済社, 昭和61年
 杉原実他著『基本簿記原理』中央経済社, 昭和62年
 染谷恭次郎著『協業簿記－基礎と実践－』昭和62年
 高田正淳他編『テキストブック会計学(2)〔改訂版〕簿記』有斐閣, 昭和59年
 高松和男著『簿記通論』(改訂版) 実教出版, 昭和60年
 高松和男著『簿記論』(四訂版) 税務経理協会, 昭和61年
 武田安弘他著『最新簿記精説－基礎編－(上巻)』創成社, 昭和62年
 田島四郎著『商業簿記 理論と実務』国元書房, 昭和57年
 玉田啓八著『現代簿記論』学文社, 昭和62年
 近澤弘治著『簿記の実務』(第2増訂版) 森山書店, 昭和53年
 柘植敏治編著『新版現代簿記論』中央経済社, 昭和56年
 津の国長四郎他著『複式簿記の基礎－理論と応用－』中央経済社, 昭和62年
 伊達陽著『簿記学通論』(改訂版) 中央経済社, 昭和62年
 寺島平他著『簿記の理論と演習』中央経済社, 昭和62年
 戸田秀雄他著『複式簿記要論』(改訂版) 中央経済社, 昭和59年

簿記原理に対する学生の意識と問題点

- 富岡幸雄編著『講座初級商業簿記』（改訂版）税務経理協会，昭和59年
友杉芳正著『簿記会計論』中部日本教育文化会，昭和62年
中村忠著『現代簿記』白桃書房，昭和62年
中村泰將著『現代簿記精説』中央経済社，昭和61年
日本大学会計学研究室編『基本簿記』（改訂版），昭和62年
沼田嘉穂著『商業簿記』中央経済社，昭和54年
野澤孝之助著『商業簿記演習』（改訂版）中央経済社，昭和59年
長谷中丸他著『簿記概論』（改訂版）中央経済社，昭和61年
服部俊治編著『簿記講義』同文館出版，昭和59年
濱田弘作他著『明快簿記会計』広文社，昭和58年
濱田弘作他著『現代簿記講義』多賀出版，昭和62年
原田行男他著『簿記学通論』税務経理協会，昭和58年
久松治夫著『現代簿記論』創成社，昭和57年
藤永弘他編著『現代企業簿記』中央経済社，昭和60年
堀友章他著『簿記の基礎と演習』税務経理協会，昭和58年
増谷裕久他著『現代簿記総論』（改訂版）中央経済社，昭和60年
松尾憲橘編『明治大学経理研究所基礎講座Ⅰ簿記』（改訂版）税務経理協会，昭和60年
松原繁美著『基本簿記精説』税務経理協会，昭和62年
松本公文他著『BOOKKEEPING』白桃書房，平成元年
三浦正一編『現代簿記要論』創成社，昭和62年
宮上一男著『簿記会計の基礎』森山書店，昭和61年
森藤一男著『複式簿記の原理』中央経済社，昭和60年
安国一他著『現代簿記概説』創成社，昭和58年
安平昭二他著『簿記概論』千倉書房，昭和54年
安平昭二著『簿記要論』（改訂版）同文館出版，昭和61年
安平昭二著『簿記Ⅰ（初級編）』千倉書房，昭和62年
山口年一著『現代簿記精講』（三訂版）同文館出版，昭和62年
山下勝治著『新版近代簿記論』千倉書房，昭和43年
山田邦男他著『現代企業簿記』（2訂版）税務経理協会，昭和62年
山榘忠恕著『複式簿記原理』千倉書房，昭和61年
山本繁著『現代簿記』（改訂版）同文館出版，昭和62年
湯田雅夫他著『演習商業簿記入門』中央経済社，昭和61年
早稲田大学会計学研究室編『最新簿記通論』（改訂版）中央経済社，昭和60年
和田木松太郎他著『最新簿記提要』泉文堂，昭和62年